

連載：[海外] グローバル体験

第2回 米国 多様性（ダイバーシティ）

研究員 杉本 晴重

色々な価値観を理解する

近年、日本でも多様性（ダイバーシティ）の重要性と有効性特に企業経営におけるメリットを取り上げることが多くなりました。これは少子化に伴う労働力不足を補う女性活用や、企業のグローバル化に対応する外国人活用が背景にあります。私が40年前に米国赴任した時に刺激を受けた一つがこの多様性でした。

まず職場では、セールス部門や人事部門のトップは女性で、人種も白人、黒人、黄色人種、中国人、中南米等多彩でした。後年シリコンバレーに赴任した際は、更にインド、中東、ベトナム、タイなどアジアの人達が加わりその多彩さはさらに増えました。

しかし、私が米国で強く感じたのは、女性や外国人活用に限らず、普通の人達が持っている考え方、価値観の多様性と、それを堂々と主張する態度で、私にとっては勇気と言っても良いくらいでした。当時は多様性という言葉もポピュラーではなく、私もどう表現して良いか分らなかった。「外人は偏差が非常に大きい」と説明しました。

とにかく日本人と比較すると、考え・視点・信条を始め、服装・態度・趣味まで、かなり幅があるという意味です。

日本は島国で、日本民族はほぼ均一民族で似たような考え方の人が多いと言われていますし、実際「阿吽の呼吸」「言わなくても分るだろう」が通じました。しかし、米国では思いがけない意見やアイデア、時にはクレームが次々と出てきます。これは言葉、言語の問題ではありません。本当に色々な人がいる事が当たり前の事です。

そして、この多様性を正しく認識、評価、尊重して真摯に応えることが重要であることを学びました。

言葉できちんと「あなたのアイデアのここは良い悪い。理由は云々とか。あなたの提案を更に検討する、しない等」を丁寧に明確にコメントする必要がありました。

この多様な人がいることが職場にも社会にも刺激を与え、活性化し競争させ、更に、何か新しい事をやってやろうと言うチャレンジ精神が加わって米国発のイノベーションを多数生みだしています。

少子高齢化とまだ男性社会の色濃い日本でも、女性と外国人の活躍の場がもっと広がれば、それが刺激と活気を与え、新たな文化や社会変革を起こすだろうことを確信しています。

以上